少年少女のための

現代日本文学全集

20

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集20

短歌俳句集

定価 二五〇円

昭和三十年八月三十日 初版発行
昭和三十三年二月一日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

東京都千代田区神田神保町二ノ二一

伊藤印刷株式会社
石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、真実や美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

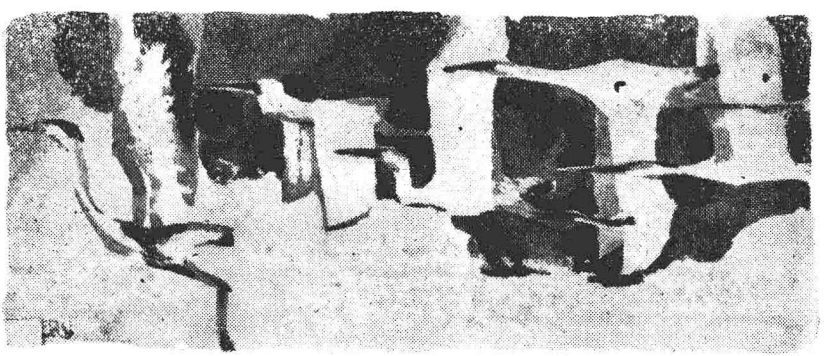
この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますので、きっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

★本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた註です。

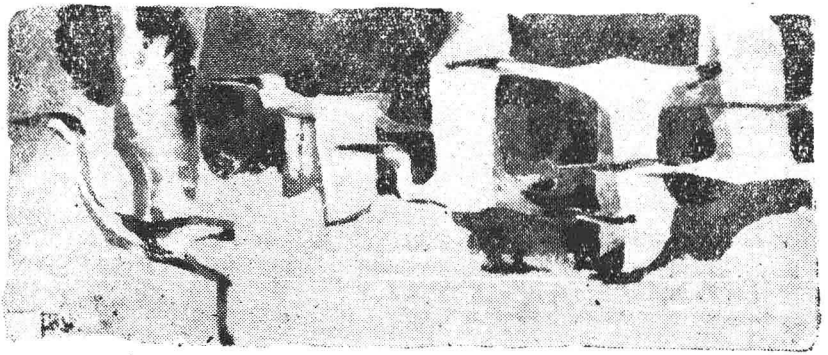
短歌集もくじ

現代短歌とは何か……九
落合直文の短歌……一四
與謝野鐵幹の短歌……二〇
與謝野晶子の短歌……二六
石川啄木の短歌……三三
北原白秋の短歌……三八
佐佐木信綱の短歌……四四
木下利玄の短歌……五〇
九條武子の短歌……五六
正岡子規の短歌……六一



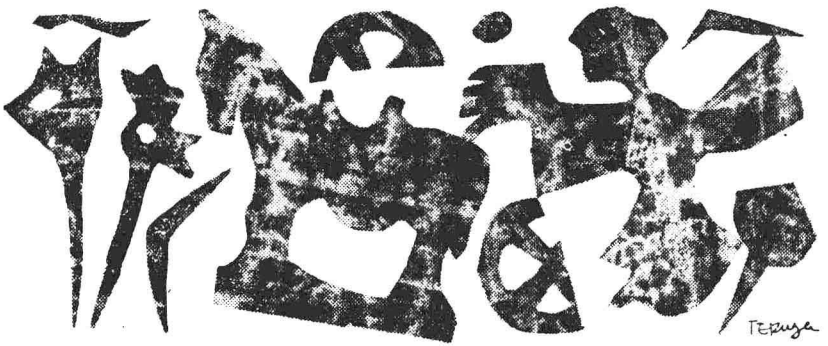
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

伊藤左千夫の短歌……六七
長塚節の短歌……七三
島木赤彦の短歌……七九
中村憲吉の短歌……八五
齋藤茂吉の短歌……九一
金子薫園の短歌……九六
尾上柴舟の短歌……一〇三
若山牧水の短歌……一〇八
前田夕暮の短歌……一一四
窪田空穂の短歌……一二〇
太田水穂の短歌……一二六
解説　片桐顯智

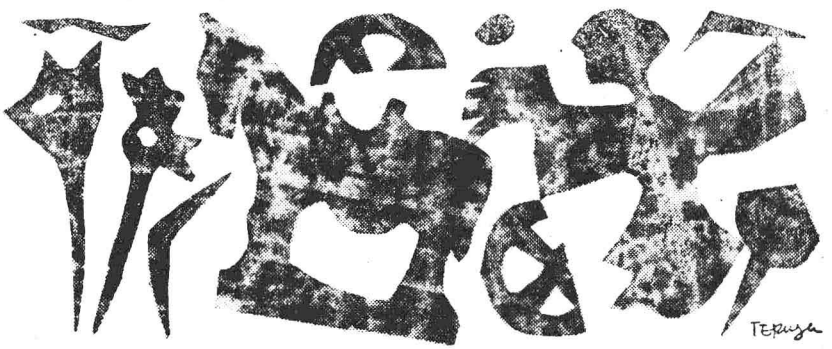


俳句集もくじ

近代俳句の展望……一三三
正岡子規の俳句……一五三
内藤鳴雪の俳句……一五六
巖谷小波の俳句……一六〇
角田竹冷の俳句……一六四
岡野知十の俳句……一六七
伊藤松宇の俳句……一七一
河東碧梧桐の俳句……一七五
大須賀乙字の俳句……一七九
中塚一碧楼の俳句……一八三
荻原井泉水の俳句……一八七
高濱虚子の俳句……一九一



夏目漱石の俳句……一九五
松根東洋城の俳句……一九九
渡辺水巴の俳句……二〇三
原石鼎の俳句……二〇七
飯田蛇笏の俳句……二一〇
村上鬼城の俳句……二一三
石井露月の俳句……二一七
久保田万太郎の俳句……二二〇
芥川龍之介の俳句……二二四
水原秋桜子の俳句……二二八
山口誓子の俳句……二三三
日野草城の俳句……二三七
解説　宇田　久



短歌集

片桐顕智編

現代短歌とは何か

かめにさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり　　正岡子規

願わくばわれ春風に身をなしてうれいある人の門をとわばや　　佐佐木信綱

この二つの歌は、明治時代のはじめに作られた歌です。一つは、病気で寝ている正岡子規が、ふじの花をながめて、そのじっさいのことがらを、ありのままに写した歌です。一つは、佐佐木信綱の歌で、じぶんのほんとうの気持をやはり、そのまま歌ったものであります。このように、ほんとうの気持、ありのままのけしきやようすを、歌に作るようになったのが、現代の短歌です。むずかしくいえば、実景実情主義が、現代短歌の特色の一つといえましょう。

さて、短歌は、現代（明治以後）になってから、和歌のことをさしていうようになりました。和歌というのは、日本の詩歌という意味で、短歌（三十一音数）ばかりか、長歌とか施頭歌などをふくめていいます。和歌のなかで、短歌の形式がすぐれているために、ずっと残り、現代までつづいているわけです。しかし、明治時代まえには、和歌とよんでいましたが、現代になってから、短歌とよばれるようになったのです。現代の新しい和歌は、短歌ということになります。

古い時代の和歌を旧派とよび、新らしい現代短歌を新派とよばれた時代があります。つまり、明治のはじめこ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ろ、古い旧派の歌を、新らしい新派の歌に革新しようとする運動がおこったころです。この運動を新派和歌運動といいます。はじめにだした正岡子規、佐佐木信綱をはじめ、落合直文、與謝野鉄幹などの人たちは、古い歌をあらため、現代の新らしい歌を作り出すために努力しました。

現代短歌とは、旧派の和歌とどういう点が、あらためられ、新らしくなったのでしょうか。それについて説明しておきましょう。つまり、現代短歌の特色です。

第一は、はじめにのべたとおり、実景実情となったことです。ほんとうの気持、ありのままのすがたを、歌によむようになったことです。万葉集時代はともかく、明治時代のまえまでは、歌といえば、花鳥風月となって、いつも同じようなことを歌って、ほんとうにじぶんの目で見たもの、感じたものをよまず、頭のなかでできあがったものをよむようになっていました。それは詩歌ではなく、ただことばの遊びだというので、現代になって、じぶんのほんとうの気持やありのままのすがたを、よむべきであるとして、花鳥風月ばかりでなく、目にうつるもの、心に感じるものなんでもよむようにしました。

第二は、題詠をやめたことです。題詠とは、現代のまえまで、歌題といって、歌の題にしたがって歌をよむならわしでした。たとえば「松上鶴」（松の木の上にとんでいたりとまっている鶴）「海上朝日」（海の上に出るあさひ）といったように、歌の題がはじめに出ます。それによって、三十一文字の歌をよむのですから、どうしても作ったもので、しぜんに生まれる歌とはなりません。第一にのべた実景実情とは、ちがったものになります。それが題詠のために、そうなるのが多いので、題詠をやめて、なんでも自由によむべきであるとしました。自由なものをよむことは、歌の世界をひろげることとなり、歌をよむ人の個性を生かすことになったわけです。

第三に、歌に用いることばを自由にしたことです。旧派の和歌は、歌ことばとか雅語とかいって、俗語（ふつうの話しことば）や漢語などを用いることを禁じています。「けるかな」とか「なるかみのつかい」（雷信電話のこと）といって、すべて「やまとことば」（日本固有のことば）を用いなければなりません。それでは、新し

いことがらや、外国からきたものなどを、自由によめるわけがありません。そこで新派の短歌をやる人たちは、歌に用いることばを制限しないで、どんなことばでも自由に用いてよむべきであるとしました。あたりまえのことですが、こんなことでもなかなか実現しにくかったのです。

第四に、だれでもが歌をよむようにしたことです。明治のまえまで、歌をよむ人は、身分の高い人、お坊さん、神主、学者といった人たちにかぎられていました。身分とか階級のうるさい時代だったので、文字をよみ、書きできる人たちは、そういう人たちが多かったからです。明治になって、階級も身分もなくなり、すべての国民が学問ができるように進歩したので、短歌文学も、すべての国民に解放されることになりました。身分や階級をとわず、だれでもよみたい人が、短歌をよむようになったわけです。短歌は、はじめて万葉集時代と同じように、国民全体の文学となったことは、現代短歌の大きな特色です。このように、現代短歌は、旧派の和歌とちがう点があります。また、和歌から短歌へと名称がかわったように、進歩し、広くひろがることになりました。

短歌は、古いむかしからあるわが国特有の短い詩形です。万葉集という、わが国はじめての歌集ができたのは、今から千二百年前ですが、そのまえから、短歌はありました。千数百年の間、現代にいたるまで、短歌形式の歌はほろびないでつづいてきたわけです。万葉集から、古今集、新古今集といったぐあいに、数多くの勅撰和歌集（天皇によってあまれた歌集）私家集（個人の歌集）があり、歌の数は、数えきれないくらい多いものになっています。

万葉集は、大伴家持が編したものといわれていますが、平安時代になっての勅撰集は、十八代集といって、古今集、千載集、新古今集など十八を数えます。そして鎌倉時代（中世）にまでわたって、歴代の天皇が、和歌をたいせつにされて歌集を作られました。歌風（歌の特色）は、時代ごとにかわっていきますが、和歌の歴史では、万葉集、古今集、新古今集を、三大歌風といっています。

万葉集は、歌の調べが強く、真実な感動がそのままよ

みだされています。古今集になると、歌の調べがやさしくなり、技巧が加わってきますし、新古今集となると、さらに象徴的になります。例で示すと、次のような歌となります。

東の野にかぎろいの立つ見えてかえり見すれば月かたぶきぬ　（万葉集）

ひさかたの光のどけき春の日にしず心なく花の散るらん　（古今集）

山ふかみ春とも知らぬ杉の戸にたえだえかかる雪の玉水　（新古今集）

足利時代から戦国時代にうつると、和歌もすたれますが、徳川時代となると、また和歌がさかんになり、加茂真淵、本居宣長などの国学（日本についての学問）とむすびついて、歌が作られてきます。しかし、幕末には、香川景樹など見るべき歌人もいますが、前にのべた旧派の和歌といわれる歌が大部分です。そして、明治になると　落合直文、與謝野鉄幹、正岡子規、佐佐木信綱などの歌人があらわれ、旧派の歌をあらため、新派和歌、つまり現代短歌をうち立てることになります。現代は、いろいろな文芸思想も、外国からはいってきたので、写実主義、浪漫主義、自然主義なども、短歌に見られます。また、古くから伝わっている文学だけに、万葉集、古今集などの歌風をついでいる歌風もあり、それぞれすぐれた歌人の系統をひいて、発展していき、和歌史の上で万葉時代とならぶ、さかんな時代といえます。ここにあげた歌人は、現代歌人のすべてではなく、また、系統からいっても、このほかのすぐれた歌人もたくさんいます。代表とみられる歌人のなかから、さらにえらんだ歌人ですが、現代短歌のようすを知るには、じゅうぶんだと思います。

つづいて、短歌の形式について、かんたんに説明しましょう。短歌は、三十一文字（みそひともじ、または、みそまりひともじ）といわれますが、平仮名で書くとそうなります。字のあまって、三十二か三文字の歌を、字

あまり、不足しているのを字たらずといいます。しかし、正しくは五句からできている三十一音数です。五句体とは、五音七音五音七音七音の五つですが、それぞれに名まえがついています。

白雲は　　（第一句、初句、頭句）
空にうかべり（第二句　胸句）
谷川の（第三句　腰句）
石みな石は（第四句　脚句）
おのずからなる（第五句　結句、尾句）

第一句から三句までを「かみの句」といい、第四句五句を「しもの句」といいます。この歌のように、第二句で終止形になっているのを、二句切れといい、三句で終るのを三句切れといいます。

そこで、一首の歌をみる場合、かならず五句体（五七五七七）にわけてよんでみることです。ときには、各句にまとまらず、二つの句にわたっている歌がありますが、それは「句またがり」といいます。五句にわけてよめば、その歌の構成がわかり、意味も通じますが、一気によむと、理解しにくいことがあります。

それから、短歌は抒情詩ですが、だいたい上句が「何々であるから」ということがらをよんでおり、下句が「何々である」という表現が多いものです。短歌をよみ、味わう場合に、今までのべたことを参考にしてください。

落合直文の短歌

桜

緋縅のよろいをつけて太刀はきてみばやとぞおもう山桜花

（明治二十五年）

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころここと定めん

（明治二十六年）

門松

一つもて君を祝わん一つもて親を祝わんふたもとある松

（明治二十七年）

これらは、落合直文の中期の歌です。

落合直文は、仙台藩士鮎貝盛房の、二男として生まれましたが、十四才のとき、仙台神道中教院に入学し、その院の統督者であった、落合直亮の養子になりました。のち、養父の任地伊勢に行き、神宮教院に学びましたが、明治十四年卒業し、上京して以来、東京で生活しております。上京翌年、東京大学古典講習科が創立されたので、そこにはいって勉学を続けましたが、兵役のために中断し、除隊後、多くの学校で、教壇に立ちました。直文の学問は、国学者であった養父の感化によるもので、『日本文学全書』（明治二三）その他を刊行して、国語、国文学の普及につとめたことも、大きな業績でありますが、いっぽうまた、浅香社を創立（明治二六・二）し、和歌革新のしごとを、議論から実行に移す最初の人となり、旧派和歌、新派和歌、それぞれの長所をとって、新味ある

作をなすように指導しましたので、與謝野鉄幹、金子薫園、尾上柴舟のような、すぐれた後継者を出しました。直文が、現代短歌の開祖のようにみられているのも、当然でありましょう。

右にあげた三首は、直文が、和歌の革新を考えはじめてからのもので、それ以前の、初期の作は、旧派（千編一律の想を平弱な調べで歌うもの）のままといっていいようです。

最初の歌は、浅香社創立前年の作であります、むかしの武人のすがたをして、山桜をみたい、という意味のもので、過去の時代への、あこがれがみえます。「桜」という題でよんだ歌ですが、いかにも武士の家に生まれた人のものらしい作品です。文武両道を理想とする、日本男児的な心持を、華麗な絵として、表わしたような歌で、当時、共鳴者が多く、新派和歌は、これをもって始まるというふうにいいはやされ、「緋緘の直文」の名声は、はなはだ高かったといいます。

二番めの歌は、自分の墓所を、萩寺に定めようという ものです。「萩の家」と号したほど、萩のすきだった直文のものらしい作といえます。原稿に、丶〇〇印がついているので、得意の作だったのだろうといわれています。「露の身」は、露の消えるように、はかなく、死んでゆく人間のことをいったのですが、それは、「萩」ということばに、密接につながっているものであり、また、「露」と「おくつき（墓）」の「おく」は、縁語（たとえば、露に縁のある置くということばを、ほかの意味に変えて用いるもの）関係にあるというふうで、この歌の表現のしかたには、旧派的な技巧が残っています。けれども、おもむき深くさいている萩を見て、死んでからも、それにうずもれていたい、と思ったので、見たままを、すなおにいい表わしたところは、新しい詠法といえましょう。萩寺（龍眼寺）は、柳島にあり、この直文の歌を刻んだ碑が、立っているということです。

三首めは、「門松」を題として、よんだもので、二本ある門松の、一本で君を、一本で親を祝おうという意味の歌です。君や親を祝うという心持は、直文の家から、学問を考えれば、ごく自然なものといっていいでしょう。西洋心酔の時代の反動として、国粋保存のさけばれつつあった時代だけに、いっぽん受けがしたとみえて、非常

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com